

四旬節第四主日

2011.4.3

ヨハネ 9・1,6-9,13-17,34-38

今日の福音は、ヨハネ福音書9章に語られている、イエスによって光の中に立たせていただいた一人の人の物語です。今日の福音の朗読箇所指定は二通りあって、お手元の聖書と典礼では9章の抜書きのようになっていますが、これはミサの全体の時間を配慮してそうなっていると思われます。家に聖書のある方はお帰りになってから、ヨハネ福音書9章の全体を読み返してご覧になることをお勧めいたします。全体を味わうことによって、今日のイエスの奇跡のみ業が持つ意味をもっとよく味わうことが出来ると思います。ここでは、今日の朗読で省かれている部分を補いながらお話することにいたします。

通りすがりに、道端に座って物乞いをしている、生まれながらに目の見えない人の前で足を止めた弟子たちは、「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」と尋ねます。ずいぶん無神経で、ぶしつけな質問だと思いますが、これは、その間に対するイエスの答えを引き出すために、ここに語られているというふうを受け止めたいと思います。私たちも、これほどまでにあからさまにではなくとも、あの時弟子たちの心に浮かんだような思いを持つことがあります。私たちに受け入れがたいことが起こるたびに、私たちの心にも、弟子たちの心に浮かんだのと同じような思いが湧き起こってきます。何が原因で、誰の責任でこのようになってしまったのか。確かに、私たちが経験する一つ一つの惨事や、思いがけない事故の裏には、それが引き起こされた直接、間接の原因や要因、その責任が問われるべき責任の所在があるにちがいません。けれども、今私たちが巻き込まれている大災害を前にして、私たちの常日頃のこのような思考方法の虚しさを感じざるを得ません。一人の人が生まれながらに目が見えないまま生まれてきたことは、その人にとってどれほど担いがたい苦しみであるか、私たちの想像を超えています。けれども、たとえその原因と責任の所在が突き止められたとしても、それだけでは、その人にとっては救いとはならないのではないかと思います。問題はその先にある。あの人の目を見えるようにしてくださった主は、そのように言われているのではないのでしょうか。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」とイエスは言われたのです。そのように言われて、イエスはあの人の目を開いてくださったのです。

私たちも、この大災害の中で、私たちの目が真実開かれることを願いたいと

思います。見るべきものをしかと見届け、学ぶべきことを学ばせていただくための光を求めたいと思います。この大災害の最中にも、神の業は、私たちの思いを超えて露わになっているにちがいないからです。今日の福音は、生まれながらに目の見えなかった一人の人において現れた神の驚くべき神のみわざを語っています。神の業は、自然がもたらした大災害によって示されているではありません。神の業はそれに巻き込まれざるを得ない一人一人の人間を通して示されるのです。このような恐怖の前に、人間とはどのようなものであるのか。そして、そのような恐怖の中にあっても、人間とはどのようなものであり得るのかということを通して、私たち人間に与えられた神の業は示されているのです。その全てを私たちはイエスへの信仰によって目を開かれた者たちとして、見届けなければならないのです。

イエスによって見えるようにされたあの人を囲んで、人々はさまざまに問いかけています。その問は、私たちにも向けられているはずです。神を信じる者として、カトリックの信者として、あなたは今回のこの大災害をどのように受け止め、どのように行動しようとしているのか。答えようのない重い問です。早まって個人的な答えを見出そうとあせる前に、私たちがしなければならないことは、あの人がそうしたように、私たちの目を開いてくださった方にもう一度お会いすることです。私たちのカトリック信者としての信仰に立ち戻って、イエスの御前に身を投げ出すことです。生まれながらに目の見えなかった人の目を開いてくださったお方の前で、そのお方がこの災害の中で指し示しておられる神の業を見させていただきよう願ひ求めることです。自分ひとりではなく、目を開いていただいた仲間たちとともに、そのことを願ひ求めることです。私たちのために神がなさってくださった神の業の頂点には、イエスの十字架と復活が立っています。そのイエスの十字架の死と復活を信じる者たちとして、私たちが目を向ける先には、どのような悲酸な状態にあっても、そこから立ち上がろうとしている人々と、その努力を支える人々の姿が示されています。私たち自身がどのような境遇にあろうとも、私たちのなすべきことは明らかです。政府も行政も大きな痛手の中でなすべき最善のことを賢明に模索しています。けれども、私たちに分かったことは、私たち自身が、この災害を自分のこととして受け止め、自分の出来ることを通して支えあいの輪に加わることが、大きな力となるということです。このままで、この災害がもたらした危機を乗り越えられるとは到底思えません。私たちの国がこの痛手から立ち直るためには、これからじわじわと、私たちの身近にも及んでくる痛みを覚悟していなければなりません。そのような身に浸みる痛みの中で、その都度、今回の災害の犠牲となった方々のことを想い起こしたいと思います。今後、私たちの身近に迫って来る、私たちの痛みがどのようなものとなろうとも、この災害の犠牲となら

れた方々の無残な姿は私たちが経験する痛みとは比べ物にならないことだけは確かです。私たちが自らの痛みの中で、犠牲となられた方々の死を思い起こすことができ、その方々のあの姿が、痛みの中にある私たちを奮い立たせることが出来るなら、あの無数の方々の死は、人間としての私たちに生きる力を与えてくれることになると思います。私たちの信じる主イエス・キリストの十字架の姿も、そのようにして私たちに生きる力を与えていてくれるからです。私たちがまだその只中にある、この大きな災害を通して神が私たち示そうとしておられるみわざを、私たちに与えられた、信仰によって開かれた目をもって、しっかりと受け止めてゆく覚悟と恵みを求めて、全ての善意の人々と心を合わせて祈りたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高